

米沢市立図書館蔵『蒙求抄』について

―蓬左文庫蔵『蒙求抄』との対比から―

住 谷 芳 幸

文化創造学部文化創造学科

(二〇一二年九月二十日受理)

A Study of Mogyu-sho, Owned by the Yonezawa City Library

Faculty of Cultural Development, Department of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

SUMIYA Yoshiyuki

(Received September 20, 2012)

一

蓬左文庫蔵『蒙求抄』（以下「蓬左本」とする）巻頭に「私云序ノ分月舟和尚ノ本ヲ書ソ」とあることは、既に先学の指摘するところである〔注1〕。しかし、この蓬左本の序と、米沢市立図書館蔵『蒙求抄』（以下「米沢本」とする）の序とが、ほぼ同一であることは指摘されていないようである。以下で、蓬左本の序と米沢本の序とを対比させ、確認してみる。ただし、紙幅の都合上、その一部分を対比するにとどめる。また、対比のため、一文ずつ区切って表示し、文頭に文番号を表示する。さらに各文の下にそれぞれに対応する米

沢本・蓬左本の文番号を米1・蓬1等として表示する。また、対応のない場合には×を表示する。なお、本稿では、用例を引用する際に、特に必要のない限り、振り仮名、漢文の訓点等は省略した。

まずは、序の冒頭部分である。

（蓬上1オ）

- 1 蒙求ノ起ハ唐ノ安平李漸カスルソ ↓米1
- 2 梁ノ李漸ト云ハヲカシイコト也 ↓米2
- 3 易蒙ハ下艮ニシ上坎ニスル也 ↓米3
- 4 山ノ下ヨリ水ノ出ルカ蒙ソ ↓米4

- 5 幼稚ノ者カ吾ニ物ヲ問フ ↓米8
 - 6 幼稚ニ對シテ問テハナイソ ↓米9
 - 7 易ニ蒙ハ享ルト云ハ水ハセキトメテヲケトモツメテハトラルソ
↓米6
 - 8 一義蒙ハ養正ソ ↓米10
 - 9 蒙昧ノ中カラ物ヲ尋テ明カニスルソ ↓米11
 - 10 其辭ヲ取テ李潸カ名ルソ ↓米12
 - 11 モトハ易ノ事ヲ云ハ用ニモタ、ヌコトソ ↓米13
 - 12 李華ハ唐ノ世ノ名人ソ ↓米16
 - 13 蕭穎士ニ弔古戰場ノ文ヲフルイカミニカイテ見スルハ排韻等ニア
ルソ ↓米17
 - 14 李潸カ蒙求ハ困學紀聞云能分平仄ト云タ也 ↓米19
 - 15 ○安平李潸 ↓米20
 - 16 上中下三卷ニシタ惣ヲ云ホトニ一篇ト云タ也 ↓米21
 - 17 惣シテ序ト云字ハ廊序也 ↓米22
 - 18 人ノ家ニ入ラントテハ廊下ヲ透ライテハ本家ヘ入ラレヌ者也
↓米23
 - 19 一篇ノ大意ヲ云イアラハカス也 ↓米27
 - 20 列古人 ↓米28
 - 21 古人ノ言行ハ美惡ヲ列テラク也 ↓米29
 - 22 ヨイ事ヲ云タモ爲人ノ惡シキコトヲシタモ人ノタメニ手本ニセウ
スルト云コト也 ↓米30
- (米上1オ)
- 1 蒙求ノ起ハ唐ノ安平李潸カスルソ ↓蓬1

- 2 梁ノ李潸ト云ハヲカシイコト也 ↓蓬2
 - 3 易蒙卦ハ坎下ヲ艮上ヲ也 ↓蓬3
 - 4 山ヨリ下カラ水ノ出カ蒙ソ ↓蓬4
 - 5 蒙卦象曰山下出泉蒙ナリ ↓蓬×
 - 6 易蒙亨ルト云ハ水ハセキトメテヲケトモツメテハトラルソ
↓蓬7
 - 7 又匪我求童蒙々々求我 ↓蓬×
 - 8 幼稚ノ者カ我ニ物ヲ問ソ ↓蓬5
 - 9 幼稚ニ我カ問テハナイソ ↓蓬6
 - 10 又蒙養正 ↓蓬8
 - 11 蒙昧ノ中カラ物ヲ尋テ明ニスルソ ↓蓬9
 - 12 其辭ヲ取テ李潸カ此書ニ名ルソ ↓蓬10
 - 13 モトハ易ノ事ヲ云ハ用ニモタ、ヌコトソ ↓蓬11
 - 14 養雲按 蒙求易蒙卦蒙亨匪我求童蒙々々求我 ↓蓬×
 - 15 初筮スルトキハ告ク ↓蓬×
- (漢文十三行略) ↓蓬×
- 16 李華ハ唐ノ世ノ名人ソ ↓蓬12
 - 17 蕭穎士ニ弔古戰場文ヲフルイ紙ニ書テ看スルコト排韻等ニアルソ
↓蓬13
 - 18 養按 唐書 文藝傳 李華字遐叔趙州人少曠達元宗入蜀華
↓蓬×
- (漢文八行略) ↓蓬×
- 19 抄曰李潸カ蒙求ハ困學紀聞云能分平仄ト云タソ ↓蓬14
 - 20 一段安平李潸 ↓蓬15
 - 21 上中下三卷ニシタソ惣ヲ云ホトニ一篇ト云也 ↓蓬16

22 惣シテ序ト云字ハ序ハ廊也 ↓蓬17
23 人ノ家ニ入ラントテハ廊下ヲ透テナラテハ本家ヘ入ラレヌ者也
↓蓬18

24 此蒙求ニ入ラン爲ノ序也 ↓蓬×

25 又ハ緒也トモ云ソ ↓蓬×

26 上四字安平李澣下五字著蒙求一篇 ↓蓬×

27 一篇ノ大意ヲ云イアラハス也 ↓蓬19

28 列古人 ↓蓬20

29 古人ノ言行ノ美惡ヲ列テラク也 ↓蓬21

30 ヨイ事ヲ云タモ爲人惡シキ事ヲシタモ人ノ爲ニ手本ニセウスルト
云事也 ↓蓬22

蓬4 「山ノ下ヨリ水ノ出ルカ蒙ソ」、米4 「山ヨリ下カラ水ノ出
カ蒙ソ」のように、すべてが完全に一致しているわけではなく、ま
た文の順序にも違いがあるが、ほぼ同一であると認められよう。た
だ、米沢本には蓬左本に対し、米5・7・14・15・18・24・25・
26、および省略した漢文二十一行が追加されている。そして、米
14・18の追加部分には「養雲按」「養按」と表示されており、その
後に省略した漢文が続いている。また、同じく追加部分の米5・
7・26も「養雲按」「養按」の表示はないが、漢文の引用である。
同様に、序の末尾部分である。

(蓬上5ウ)

1 不亦 ↓米1

2 文章ヲカ、ントテハ故事機縁ヲ討論セイテハ也 ↓米2

3 此蒙求ニテ討論シテヨクヲホヘタレハ故事ヲヨクシルホトニ文章
モヤカテ成ルホトニ捷徑也 ↓米3

4 留謂時己酉一年號ナキコトハ如何 ↓米8

5 先達モ不審セラレヌ乎 ↓米9

6 又文ノ體乎 ↓米10

7 傳寫ノ誤乎 ↓米11

8 光祿大夫行右散騎侍臣徐子光序トアルモアル也 ↓米5

9 行ハカネタ心也 ↓米6

10 行トハ位卑シテ官高ヲ云乎 ↓米7

11 標題徐狀元補注蒙求卷上 ↓米14

12 標ハ木枝ノサキ也 ↓米15

13 題ハヒタイ也 ↓米16

14 漢音ハテイ也 ↓米17

15 漢音ニヨムヘキコト也 ↓米18

16 心ハ人ノヒタイト木ノ梢トハチヤツトミユルホトニ云ソ ↓米19

17 徐狀元ハ徐子光ヲ云也 ↓米21

18 李澣カ四字ツ、ニシテ傳記ヲ引テシタハ古注也 ↓米22

19 ソレヲネンコロニナカナカト引タカ補注也 ↓米23

20 狀元ハ狀元及第シタホトニ賞翫シテ云也 ↓米24

21 張狀元カ論語ノ注ノ類也 ↓米25

22 東坡カ詩ニ王十朋ヲ王狀元ト云タ類ソ ↓米26

23 狀ハ勝ソ ↓米27

24 元ハ首ソ ↓米28

25 金榜ニ題名第一ノ首ト云心ソ ↓米29

26 狀元及第ノ第一也 ↓米30

27 徐光ハヨクモ知レヌ者也 ↓米 31

(米上7才)

1 不亦 ↓蓬 1

2 文章ヲ書ントテハ故事機縁ヲ討論セイテハ也 ↓蓬 2

3 此蒙求ニテ討論シテ能ク覺ヘタラハ故事ヲヨク知ホトニ文章モヤ

カテ成ルホトニ捷徑也 ↓蓬 3

4 掇都括切採也拾也 ↓蓬 ×

5 光祿大夫行右散騎侍臣徐子光序トアル本モアル也 ↓蓬 8

6 行ハカネタル心也 ↓蓬 9

7 行トハ位卑シテ官高ヲ云乎 ↓蓬 10

8 留謂時己酉一年號ナキハ如何 ↓蓬 4

9 先達モ不審ハセラレヌ乎 ↓蓬 5

10 又文之一體乎 ↓蓬 6

11 傳者ノ誤乎 ↓蓬 7

12 炳如丹青―魯按事文類聚別集第五曰聖人之言炳若丹青揚子

↓蓬 ×

13 同卷詩句云龍鸞炳天章李 ↓蓬 ×

14 ○標題徐狀元補注蒙求卷之上 ↓蓬 11

15 標ハ木ノ枝ノサキ也 ↓蓬 12

16 題ハヒタイ也 ↓蓬 13

17 漢音ハテイ也 ↓蓬 14

18 漢音ニヨムヘキ也 ↓蓬 15

19 心ハ人ノヒタイト木ノ梢トハチヤツト見ユルホトニ云ソ ↓蓬 16

20 毛韻宵韻標木抄也 ↓蓬 ×

21 徐狀元ハ徐子光ヲ云也 ↓蓬 17

22 李澣カ四字ツ、ニシテ傳記ヲ引テシタハ古註也 ↓蓬 18

23 猶懇ニ長タト引タカ補注也 ↓蓬 19

24 狀元ハ狀元及第シタホトニ賞翫シテ云也 ↓蓬 20

25 張狀元カ論語ノ注ノ類也 ↓蓬 21

26 東坡詩王十朋ヲ王狀元ト云タ類也 ↓蓬 22

27 狀ハ榜ソ ↓蓬 23

28 元ハ首ソ ↓蓬 24

29 金榜ニ題名第一ノ首ニ云心ソ ↓蓬 25

30 狀元及第ノ第一也 ↓蓬 26

31 徐光ハヨクモ知レヌ者也 ↓蓬 27

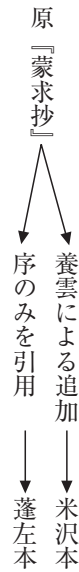
ここでも、蓬左本と米沢本とでは、文の順序に違いがあるものの、ほぼ同一であると認められよう。また、蓬左本と米沢本との違いは、冒頭部分と同様に、米沢本では、蓬左本にない米4・12・13・20の漢文が追加されていることである。

ここでは紙幅の都合上、序の冒頭部分と末尾部分とを対比したただけではあるが、蓬左本の序全体と米沢本の序全体とを対比したところ、ここで対比した部分と同様に、蓬左本の序に漢文等の注文を追加したものが、米沢本の序となっている。

蓬左本と米沢本とで対応するのは序のみである。ただし、米沢本では、序以外の部分でも「養雲按」等と表示した漢文部分が多く見いだせる。そのため、現在の蓬左本の序を含む『蒙求抄』があり（以下「原『蒙求抄』とする）、それに養雲「注2」が「養雲按」等として注文を追加した。それが現在の米沢本であろう。そして、原『蒙

『求抄』の序の部分のみを引用したものが、現在の蓬左本の序である。

すなわち、原『蒙求抄』と米沢本・蓬左本との関係を図示すれば、次のようになる。



また、蓬左本にある「私云序ノ分月舟和尚ノ本ヲ書ソ」という記載を信じるならば、原『蒙求抄』は月舟の抄と考えるべきであろう。

さて、前に示したように、米沢本の序に見られる追加部分の多くには、「養雲按」等と表示されている。さらに、この「養雲按」等の表示が、序の部分ばかりではなく米沢本全体にわたって見いだされることは、前に述べた。そして、「養雲按」等という表示は、米沢本の冒頭部分の米19にある「抄云」という表示と密接にかかわっている。米18では「養按 唐書 文藝傳（以下略）」とあり、そのあとに省略した漢文八行が続いている。そして、米19「抄曰李漸力蒙求ハ（以下略）」となっている。米19に対応する蓬14では「李漸力蒙求ハ（以下略）」とあるのみで、米19にある「抄曰」の記載はない。すなわち、米沢本では「養按」として米18の漢文を追加したことにより、米19に蓬14にはない「抄曰」を加える必要が生じたと考えるのである。

この「養雲按」等の追加部分と「抄曰」等の表示との関係は、次のようなものが典型的であると考える。

(米上86才7)

養按穀魚既反剛穀有立也 抄嚴重ニキフキモノニモ錢ヲツカウトキ
ンハニコト笑ナリ

すなわち、「養按」として新たな説を追加した。そして、その追加した部分と本来からあった部分との区別を明らかにするため、「抄」の表示がなされたものと考えたい。

このような「抄曰」「抄云」「抄」等の表示は、米沢本上中巻に五十九例ある。そのうち、「養雲按」等として追加された部分の後に「抄曰」等と表示されているものは四十二例に及ぶ。また、「養雲按」等の表示はないが、漢文の後に「抄曰」等と表示されているものが十例、和文の後に「抄曰」等と表示されているものが二例である。残り五例は「抄ニアリ」等と「抄」からの引用であることを示すものである。もちろん、「養雲按」等の追加部分と思われるものが数行に及ぶ場合もある。そして、それらすべてが、養雲による追加である保証はない。しかし、前に示した用例のように明らかに養雲による追加部分と考えられる用例も多い。そのため、「養雲按」等以下「抄曰」等以上までを養雲による追加部分と考えてよさそうである。また、前に述べたように「養雲按」等の表示はないが、漢文の後に「抄曰」等と表示されるものが十例ある。前では、蓬左本の序に漢文等の注文を追加したものを米沢本の序とした。米沢本では序以外の部分でも、「養雲按」等と表示された部分は、漢文である場合が圧倒的に多い。そのため、この「抄曰」等の前にある十例の漢文部分も「養雲按」等の表示はないものの、養雲による追加部分かもしれない。

(住谷芳幸)

以上のことから、養雲は原『蒙求抄』に漢文等の自説を追加した。その追加部分を明示するために「養雲按」等の表示を加え、原『蒙求抄』からの引用であることを明示するために「抄曰」等の表示を加えたものと考えられよう。

二

蓬左本に月舟の序のみが引用されている理由について考えてみたい。蓬左本の序には、前に示したように「標題徐状元補注蒙求卷上」(上6才4)とあり、『標題徐状元補注蒙求』(以下「補注蒙求」とする)についての注釈であることがわかる。しかし、序以外は、補注蒙求についての注釈ではない。そのことは、序以外には次のような補注蒙求についての多くの記載が見いだされることからわかる。

(蓬上13ウ7)

難束濕タハ易束也薪字ハ補注漢書ニハナキノ古注史記ニハ
アリ如束濕ト云モ底ハ薪ノ心ソ

ここでは、補注蒙求・『漢書』には「薪」の字がなく、古注『蒙求』・『史記』には「薪」の字があることを述べている。このような補注蒙求についての記載は、蓬左本に三百四箇所ある。そして、このようにことさらに補注蒙求についての記載があることは、蓬左本の序以外の部分が、補注蒙求ではない『蒙求』についての注釈であったためであろう。

また、次のような記載もある。

(蓬上30才10)

コ、ニハ文帝トアリ補注排ニハ武帝トアリ

ここは「卻説一枝」の部分であるが、本文中の「文帝」が補注蒙求では「武帝」となっていることを述べている。実際に補注蒙求である京都大学付属図書館清家文庫蔵本『蒙求』(以下「京大本」とする)では「武帝」(上22才11)とある。同じく、補注蒙求である池田(1990)所収の『文禄五年古活字版蒙求』でも「武帝」(26才9)とある。これに対し、古注本『蒙求』とされる池田(1988)・池田(1989a)・池田(1989b)所収の『増註蒙求』(上7ウ6)、『舊注蒙求』(上12才9)、『韓本蒙求』(上7ウ2)、『古本蒙求』(上9ウ5)では「文帝」となっている。

このように、蓬左本の序以外の部分は、どの『蒙求』によったものであるかの特定はできていないが、補注蒙求ではない『蒙求』に対する注釈であることは確実である。そこで、蓬左本が依拠したものには、序の部分の記載がなかったのではないだろうか。そのため、内容的には異なるものの、補注蒙求についての注釈である月舟の抄すなわち原『蒙求抄』の序を追加したのではないだろうか。もちろん、このことに確実な証拠はないのはあるが、一つの推測として述べておく。

つぎに、原『蒙求抄』でも蓬左本と同様に、序のみが月舟の序の引用であった可能性も検討してみる。米沢本では中巻巻頭に、「標題徐状元補注蒙求卷之中」(中1才1)とあることから、原『蒙求抄』は補注蒙求に対する注釈であろう。また、内容の上でも、序とそれ以外で違いがあるようにも思えない。そのため、原『蒙求抄』につ

いては、蓬左本のような、月舟の序を引用すべき理由は思いつかない。そのため、序以外の原『蒙求抄』も月舟の抄とすべきであろう。

ところで、次節で検討するが、鈴木(1970)では米沢本を、清原宣賢系の抄物と考えている(五頁)。清原宣賢による『蒙求』の注釈としては、慶応大学付属図書館蔵自筆本『蒙求聴塵』(以下「聴塵」とする)、および清原宣賢講林宗二聞書『蒙求抄』(ここでは古活字版による「注3」。以下「版本」とする)がある。しかし、聴塵・版本の序と米沢本の序とを比べても、ことさらに清原宣賢が月舟の序を引用する理由は見いだせない。

ただし、「私云序ノ分月舟和尚ノ本ヲ書ソ」として蓬左本にその序を引用した人物が、宣賢の抄を月舟の抄と誤解していた可能性は残る。この点は後に検討する。

三

米沢本について、鈴木(1970)では「結局、宣賢講を養雲が補講したものに「私」なる者が自説その他を加えたものではなからうか」(五頁)とする。さらに、蓬左本の序については、「序の部分でも上述の諸本と近い辞句もある。宣賢講に月舟説が採り入れられたのであろうか」(九頁)とする。しかし、前に見たように米沢本の序と蓬左本の序とは、ほぼ一致するのである。また、前節でも述べたが、米沢本の序と序以外の部分とは、とりたてて不連続であるとの印象はない。そのため、蓬左本の序にある「私云序ノ分月舟和尚ノ本ヲ書ソ」という記載から、米沢本を月舟の抄すなわち原『蒙求抄』に養雲が漢文等の注文を追加したものと考えた「注4」。

ところで、鈴木(1970)が、米沢本を清原宣賢系の抄物とした理

由は次の三つにまとめられる。

- 1 米沢本の本文と聴塵・版本等の清原宣賢系の抄物の本文とが類似していること。

- 2 「落下暦数」の「大永三年…」という記載が米沢本・聴塵の本文にも見いだせること「注5」。

- 3 この「大永三年…」という記載が、版本では「享祿二年…」に変えられていること「注6」。

もちろん、米沢本の本文が、聴塵・版本の本文と類似していることも事実である。以下で、米沢本・蓬左本の序の冒頭部分と、聴塵・版本の冒頭部分とを対比してみる。また、前と同様に各本文を対比するため、米1・蓬1・聴1・版1等として対応する文番号を表示する。また、対応のない場合は×を表示する。

(聴上1オ)

- 1 是ハ古注ノ序也 ↓蓬× ↓米× ↓版1
- 2 補注ニ此序ヲ載ヘキニアラストイヘトモ後人カイツレヲモ備ヘ見センカタメニレウケンヲ以テ載タル也 ↓蓬× ↓米×
↓版2・3
- 3 蒙求ヲ作り出ス事ハ唐ノ安平ノ李漸カスル也 ↓蓬1 ↓米×
↓版50
- 4 梁ト云ハ非也 ↓蓬2 ↓米2 ↓版49
- 5 蒙求ト名ケタル事ハ易ノ蒙ノ卦ヨリシテ付タリ ↓蓬× ↓米×
↓版5
- 6 蒙ノ卦ハ坎下艮上ノ卦也 ↓蓬3 ↓米3 ↓版6
- 7 蒙ノ卦ノ象ノ辭ニ山下出泉蒙ト云リ ↓蓬× ↓米5 ↓版7

- 8 山ノ下ニ水ノ出テ、マツクリトタマルヲ蒙ト云 ↓蓬4 ↓米4
↓版×
- 9 艮ヲハ山ニトル ↓蓬×
- 10 又艮ハ止心也 ↓蓬×
- 11 坎ハ水ニトル ↓蓬×
- 12 又坎ハ險ナル心也 ↓蓬×
- 13 山下ニ出ル水カ前ヘ流テ行カントスレハ山アリテ推止メラレテユカレス ↓蓬×
- 14 退カントスレハ險難ニシテ退カレス ↓蓬×
- 15 進モセラレス退モセラレスシテキタル體カ蒙也 ↓蓬×
- 16 コレハ卦體ナリ ↓蓬×
- 17 人ニ取テ云ハワラウヘノ好事トモ惡事トモ知ラスシテキタル體カ蒙也 ↓蓬×
- 18 蒙タル處ノ水カフリス、イタル聖人ノ道也 ↓蓬×
- 19 進マス退カス蒙昧ニシテ隱默トシテキタル處カ聖人ノ本意也 ↓蓬×
- 20 山下ノ水カイツ方ヘモ流テ行カント思フカ求ノ心也 ↓蓬×
- 21 童蒙ノ者カタレ人ニモ物ヲ問ハント思フカ童ノ心也 ↓蓬×
- 22 易ニ匪我求童蒙童蒙求我ト云リ ↓蓬×
- 23 我トハ師也 ↓蓬×
- 24 幼稚ノ者カ物ヲシル師ニ問ハント求ル也 ↓蓬5 ↓米8

- ↓版20
- 25 師家ヨリ幼稚ノ者ニ問ニアラス ↓蓬6 ↓米9 ↓版×
- 26 闇キ者ハ明ナル者ノ求ム ↓蓬×
- 27 明ナル者ハ闇キ者ニハ問ハス ↓蓬×
- 28 是蒙求ノ二字ノ心也 ↓蓬×
- 29 此字ヲ取テ李潯カ蒙求ト名ル也 ↓蓬×
- 30 師ヲハ陽ニトリ蒙ヲハ陰ニトル ↓蓬×
- 31 蒙ハ明ノ始メ也 ↓蓬×
- 32 蒙ヨリシテ師ニ問テ明ニナル也 ↓蓬9 ↓米11 ↓版×
- 33 至リ至テハ明ハ蒙ノ始也 ↓蓬×
- 34 至聖ノ上ハ還テ蒙々タル處アリ ↓蓬×
- 35 世話ニ勸學院ノ雀ハ蒙求ヲサイツルトイヘルハ李翰カ仕タル小女ノ名ヲ雀ト云 ↓蓬×
- 36 此者マテモ蒙求ヲヲホエテヨミシ事ヲ云也 ↓蓬×
- 37 唐李華字退叔(以下三行空白) ↓蓬×
- 38 此序三段也 ↓蓬×
- 39 一安平至釋之 二比其至章句 三不出至求哉 ↓蓬×
- 40 一安平李潯 ↓蓬15 ↓米20 ↓版×
- 41 上中下ノ三卷ニシタリトイヘトモ捻ヲ取テ一篇ト云也 ↓蓬16
- 42 上四字下五字ニカケリ ↓蓬×
- 43 列古人 ↓蓬20 ↓米28 ↓版62
- 44 クワツトカキノフル也 ↓蓬×

45 言ハコトハ行ハハタラキ也 ↓蓬× ↓米× ↓版×
 46 古人ノ言行美惡ヲシルス ↓蓬× ↓米29 ↓版67
 47 好ヲ云タルモ惡ヲ云タルモノノタメニハ手本ニナル也 ↓蓬22
 ↓米30 ↓版×

(版一2オ)

1 此序古注ノ序ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴1
 2 補注ニ載フ事テハナイソ ↓蓬× ↓米× ↓聴2
 3 去トモ後人ニ知セウ用テノセタソ ↓蓬× ↓米× ↓聴2
 4 子光カ序カ本ノ序ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 5 蒙求トハ易ノ蒙ノ卦ソ ↓蓬3 ↓米3 ↓聴5
 6 坎下艮上ノ卦ソ ↓蓬3 ↓米3 ↓聴6
 7 其易ノ卦ソ中ニ象詞曰山下出泉ハ蒙ナリト云ソ ↓蓬× ↓米5
 ↓聴7
 8 處テウシトラノ艮ハ山ニトルソ ↓蓬× ↓米× ↓聴9
 9 止也 ↓蓬× ↓米× ↓聴10
 10 注ヲシテ止ル心ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴10
 11 坎ハ水テ穴テ險阻ナ心ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴12
 12 山下ニアル水カ進テ行トスルハ山カアツテ進モセラレヌ ↓蓬×
 ↓米× ↓聴13
 13 又アトヘモ退ソカレヌソ險難ナホトニソ ↓蓬× ↓米×
 ↓聴14
 14 人事ノ上テ申時ハ四五歳ノワラヘノ愚ナモノカウカトシテ居タ時
 カ蒙々トシテ蒙昧ナカ如ナソ ↓蓬× ↓米× ↓聴17
 15 是カ聖人ノ本意ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×

16 流テ行ト思フカ水ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 17 小人ノ物ヲ知ヌ物ヲ知イテト思カ求ノ心ソ ↓蓬× ↓米×
 ↓聴×
 18 彖曰我童蒙ニ求ニアラス ↓蓬× ↓米7 ↓聴22
 19 童蒙我ニ求ソ ↓蓬× ↓米7 ↓聴22
 20 クライイ方カラ師匠ノ方ヘ求ルソ ↓蓬× ↓米× ↓聴20
 21 蒙昧カ明ナニ求心ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴26
 22 求レハ明ニナライテハカナワヌソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 23 山下ノ水ノイニタカルヤウニ師ヲ尋テ物ヲ問タイト思カ求ソ
 ↓蓬× ↓米× ↓聴20
 24 我ハ師家ヲ我ト指ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴23
 25 師ヲハ陽爻ニ取陰爻ヲ蒙ニトルソ ↓蓬× ↓米× ↓聴30
 26 蒙ハ明ノ始トカウ習ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴13
 27 サウ至極シテハ明ハ蒙ノ始トカウ云ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴32
 28 スクレタ明ニハ蒙々トシテ居程ニソ ↓蓬× ↓米× ↓聴34
 29 講云世話ニ勸學院ノ雀ハ蒙求ヲ囀ト云ハ李潛カツカウ小女ノ名ヲ
 雀ト云者ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴35
 30 其マテ此蒙求ヲ囀ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴36
 31 シキノ雀テハ無ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 32 未審出處可考 ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 33 序ノ事略之 ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 34 イツモノコトソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 35 李華 唐書 文藝傳ニ載ソ ↓蓬× ↓米18 ↓聴37
 36 蕭穎士ト名ヲ齊ス ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 37 蕭李ト云レタ者ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×

- 38 含元殿賦名譽ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 39 唐ノ文粹一二載ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 40 排韻李華字遐叔作含元殿賦成以示蕭穎士々曰景福之靈光之下華文辭縣麗少宏傑氣穎士健爽目肆而華自疑過之他日作弔古戰場文極思方成汗爲故紙與穎士讀之間今日誰加及穎士曰君可精思便能至矣華愕然而服 ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 41 カミヲ古ルハカイテ見セタソ ↓蓬13 ↓米17 ↓聴×
 42 是ホトニ誰カ書フソト云タレハソレノ案シタラハ是ホト書カウソト云タソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 43 文選第十一景福殿賦何平叔造之魯靈光殿賦王逸子王延壽字文考造之 ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 44 李華ハ去者ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 45 此序モヨウ書イタソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 46 名序テアルソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 47 蒙求ハイロハホトノ初學チヤホトニ長ク文章ヲ書テハ似合マイカ短ウサツト一スチニ書タカ好ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 48 妙ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 49 李潯ハ梁武帝ノ時ノ李潯ト云ハ大ナル誤也 ↓蓬2 ↓米2 ↓聴4
 50 唐ノ玄宗ノ時ノ者也 ↓蓬1 ↓米1 ↓聴3
 51 李華ト同時ノ者ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 52 サレトモサセル者トハミヘヌソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 53 往々ニ傳ナシ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 54 困學紀聞ノハニツタソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 55 ソレモ蒙求ノ事ヲ載ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×

- 56 韻ヲフンテ好レタト云タソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 57 安平―三段自始至釋之一段自比其至章句一段不出以下一段也 ↓蓬× ↓米× ↓聴39
 58 或義ニハ比其ノ段不分ソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 59 言ハ上中下卷ニシタレトモスヘテ是ヲ一篇ト云ソ ↓蓬16 ↓米21 ↓聴41
 60 上ヲ四字ニ書テ又五字ニ書テ四字五字テ一篇ノ大意ヲ云ソ ↓蓬× ↓米26 ↓聴42
 61 又七字カイテ四字ノ句ヲ三句カイタソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 62 列古―古― ↓蓬20 ↓米28 ↓聴43
 63 古人ノ言行ノ善コトヲモ惡コトヲモ書タソ ↓蓬21 ↓米29 ↓聴46
 64 韻ヲフムハ音律ニカナワセウ用ニ韻ヲフムソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 65 幼童ニサツケテソラニヲホヘサセウ用ニシタソ ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 66 勸善懲惡ノ方也 ↓蓬× ↓米× ↓聴×
 67 善コトヲモ惡ヲモ手本ニセウスルト云コトソ ↓蓬22 ↓米30 ↓聴47

文そのものとしては、一致しないものが多いものの、米沢本・蓬左本と類似した内容が書かれている部分も見いだせる。

ここでは序の部分のみを対比したが、序以外の部分、例えば「落下曆数」の部分などは、米沢本・聴塵・版本はほとんど同一の文章となっている。また、「落下曆数」ほど顕著ではないものの、米沢本・

聴塵・版本にはほとんど同一であると認められる部分も数多く見いだせる。そのため、鈴木(1970)で、米沢本を清原宣賢系の抄物とすることも当然のことと思われる。

再び、序の対比に戻ってみたい。聴7・版7に対応する米5、聴22・版18・19に対応する米7、聴37・版35に対応する米18、聴42・版60に対応する米26のように、聴塵・版本には米沢本での追加部分が見いだせる。このうち、米18には「養按」とあり、明らかに養雲による追加部分である。前に述べたように、鈴木(1970)では米沢本を「宣賢講を養雲が補講したもの」(五頁)とする。であるならば、「宣賢講を養雲が補講した」部分である「養按」と表示された米18の追加部分が、宣賢の聴塵・版本に引用されていることは問題となる。

ところで、別の部分ではあるが、米沢本と聴塵とに次のような対応がある。

(米中1ウ6)

養義先帝ハ宣帝ソ

(聴中1オ17)

先帝ハ宣帝也

この部分を鈴木(1970)では、「宣賢が養雲説を採り入れたと見るのは養雲の事跡等がほとんど不明の現段階では尚早とすべきであろう」(五頁)として処理する。しかし、米沢本で「養雲按」等として追加された部分と、京大本に加えられた宣賢による注記・聴塵・

版本とを対比すると、それほど単純には処理できない。米沢本で「養雲按」等として追加された部分は、上巻で百三十九箇所、中巻では百七十七箇所ある。これらのうち、上巻では二十四箇所、中巻では三十九箇所が、京大本注記・聴塵・版本のいずれかに見いだされるからである。以下に、全六十三例中の三例のみをあげておく。

(米上20オ9)

碌々 韻會多石貌録字相通平原君傳

公等録々注音祿索隱曰音六王昭曰録借字耳又養引説

文云録々隨從之貌也 私云已上史傳注

(聴上14ウ6)

碌々 韻會多石貌録字相通平原君傳

公等——音祿索隱曰音六王劭曰録借字耳又説文云録々隨從之貌也

(版一18ウ12)

韻會

多石貌録字相通平原君傳 公等——音祿索隱曰音六

王劭曰録借字耳又説文云録々隨從之貌也

米沢本では「又養引説文云」として養雲による追加部分であることが明示されているが、聴塵・版本では「又説文云」として記入している。

(住谷芳幸)

(米上30才9)

養按後漢書列傳十八上桓譚傳相人也注相縣

名故城在今徐州符離縣西北好音律父成帝時爲大樂令譚

以父任爲郎因好音律注宮商角徵羽謂之五聲々成文謂之音律

黃鐘大簇姑洗蕤賓無射夷則 善鼓琴 世祖即位 太司空宋弘

(以下漢文十二行略)

(京上13ウ頭注)

好音律 注宮商角徵羽謂之五聲

聲成文謂之音律謂六律黃鐘

大簇姑洗蕤賓無射夷則

(聴上30才5)

好音律トハ五音六律ソ

(版一31ウ2)

好音律注宮商―謂之五

聲々成文謂之音律六律黃鐘大簇姑洗蕤賓無射夷

則

米沢本では「養按後漢書列傳十八上桓譚傳(以下略)」として大量の漢文を引用するが、京大本頭注・聴塵・版本ではその一部分を記入している。

(米中15才7)

擇對トハヲツトヲキライヲスルソ養義

(聴中10才1)

擇對―夫^ヲキライヲスル也

(版四26才2)

擇對―ハミメワルウテ人キライヲシタホ

トニ三十二ナルマテ夫ヲモタヌソ

米沢本では「ヲツトヲキライヲスルソ」とあるが、「ヲツトヲキライヲスルソ」等の誤写であろう。ここでも、米沢本の「養義」を聴塵・版本でもほぼ同様に記入している。

ここでは、三例をあげたのみであるが、他の「養雲按」等という追加部分でも同様である。すなわち、米沢本の「養雲按」等という追加部分を京大本注記・聴塵・版本ではほぼ同じく記入しているのである。そのため、鈴木(1970)とは異なり、宣賢が養雲説を採り入れたとみるべきであろう。特に、二番目に示した「養按後漢書列傳十八上桓譚傳(以下略)」での対応のように、漢文についての対応部分を対比したところ、米沢本で記入されている漢文の一部分のみが、京大本注記・聴塵・版本に記入されている場合が多い。すなわち、米沢本から京大本注記・聴塵・版本への引用はありえても、京大本注記・聴塵・版本から米沢本への引用とは考えられないものが多いのである。もともと、文言の違いから米沢本からの直接の引用とは考えにくいものも、全六十三例中五例ほどある。例えば、次

のような例がそれである。

(米中37ウ7)

養按庸保雜作 方言

曰保庸調之南方奴婢賤稱也 滌器於市中 人ノ物ヲ食タ其器ヲ洗ソ 養謂韋昭曰瓦器也每食必滌漑者

(京中29ウ頭注)

史記 與庸保雜作 注方言曰保庸

調之南方奴婢賤稱也 滌器――

注韋昭曰瓦器也每食必滌漑者

(聴中28オ1)

史記ニハ與庸保雜作 注方言曰任庸

調之南方奴婢賤稱也 滌器――師古曰滌酒也器食器也食已

則酒之賤人之役也洒先禮反 史記注韋昭曰瓦器也每食必滌漑者

(版四74ウ4)

史記注方

言曰保庸調之南方奴婢賤稱也 滌――器ハナンソ人ニ

物ヲクワセテソノ器ヲス、イテヲクホトニ旅人屋ニスル

ヤウニソ史記注ニ瓦器也トシタ瓦ケノヤウナ物ソ注韋

昭曰瓦器也每食必滌漑者

聴塵には、米沢本にはみられない「滌器――師古曰滌酒也器食器也

食已則酒之賤人之役也洒先禮反」という師古の注が追加されているからである。ただし、京大本頭注では、米沢本とほぼ同一である。そのため、京大本頭注では米沢本から引用し、聴塵に引用する際には、原典である『史記』を確認し、師古の注を追加したものとも考えられる。残りの四例も同様に、何等かの理由が想定できそうである。

以上から、宣賢は養雲の説を含む米沢本を引用し、京大本注記・聴塵・版本を作成したと考えるべきであろう。

とすると、先に述べた鈴木(1970)が米沢本を清原宣賢系の抄物とする理由の

1 米沢本の本文と聴塵・版本等の清原宣賢系の抄物の本文とが類似すること。

2 「落下暦数」の「大永三年…」という記載が米沢本・聴塵の本文にも見いだせること。

は、単に宣賢が引用したためとして説明できる。そのため、米沢本が清原宣賢系の抄物である確実な証拠にはなりえない。

問題は、次の点となる

3 この「大永三年…」という記載が、版本では「享禄二年…」に変えられていること。

「大永三年…」という記載は、米沢本に見いだせるところから、宣賢がそのまま聴塵に引用したとして説明できる。問題は、それが版本で「享禄二年…」と改められていることである。このことについて、次の二つの説明が可能であろう。

一つは、宣賢が享禄二年に『蒙求』を講じ、その際に、「大永三年…」を「享禄二年…」に改めた。そして、それが版本に反映した

考えることである。鈴木(1970)では、宣賢による改変と考へている(六頁)。

もう一つは、月舟が享禄二年に『蒙求』を講じ、その際に、「大永三年…」を「享禄二年…」に改めたと考へることである。月舟の没年は天文二(一五三三)年であり、享禄二(一五二九)年は晩年ではあるもののその可能性がないわけではない。

さらに、両足院本『蒙求抄』に「馬安伝ヨリ聞書ナシ梅屋抄并真座主聞書并首書ヲモツテ補之」とあることは、既に鈴木(1970)の紹介するところである(六頁)。鈴木(1970)では、「馬安四至」以下の内容が、聴塵等に類似することにより、梅屋抄・真座主聞書を宣賢の講の聞書と考へている(六頁)。しかし、前に見たとおり京大本注記・聴塵・版本には、米沢本の養雲の説がそのまま引用してある。そのため、文章・内容の類似は、梅屋抄・真座主聞書が宣賢の講の聞書であることを必ずしも保証するものではない。

ところで、両足院本にいう「梅屋抄」とは、梅屋宗香によるものである。梅屋宗香は玉村(2003)によれば、「南禅寺真乗院に掛錫し、香林宗蘭・華屋宗嚴師弟に師事し、外に建仁寺一華軒の月舟壽桂に外学・文筆を学んだ。業成つて後、真乗院塔主を司り」(五四七頁)とある。とするならば、「梅屋抄」が月舟の抄であつた可能性もあろう。さらに、この方面には暗いのではあるが、「真乗院塔主」が「真座主」と呼ばれることはないのであろうか。もし、「真座主」が梅屋宗香を指すのであれば、真座主聞書も月舟の講の聞書の可能性もあろう。

さらに、この「享禄二年…」という記載は、「馬安四至」以下の「落下曆数」にある。まさに「聞書ナシ」の部分であり、「梅屋抄并真

座主聞書并首書」により補なつた部分なのである。とすれば月舟の講が版本にとり入れられた可能性も考へられることになる。

このように、版本で「大永三年…」が「享禄二年…」と改変されていることも、宣賢の講の反映である可能性と月舟の講の反映である可能性との二つが考へられる。すなわち、版本で「大永三年…」を「享禄二年…」に改変したことが、米沢本が清原宣賢系の抄物であることの確実な証拠にはならない。

以上のように、鈴木(1970)で米沢本を清原宣賢系の抄物とする三つの理由は、必ずしも確実なものとはいえないのである。

以上は、米沢本に見いだされる「養雲按」等とある養雲による追加部分を中心に見てきたが、それ以外にも次のような部分もある。

(米上43ウ2)

飾固陋―吾カイヤシキ

心ヲカサリテタシナマハト云心也

(聴上31オ6)

飾―吾カイヤシキ心ヲモタシナマハト云義也

(版一54オ1)

飾―我固陋ヲカサ

リテヨイ物タテヲセハトコノ王ノ下テナリトモ長裾ヲ引ウソ或抄云我カイヤシイ心ヲカサツテタシナマハト云心也

米沢本の「吾カイヤシキ心ヲカサリテタシナマハト云心也」は、聴塵では「吾カイヤシキ心ヲモタシナマハト云義也」として対応している。しかし、版本では「或抄云我カイヤシイ心ヲカサツテタシナマハト云心也」と「或抄云」が加えられている。また、米沢本と版本との類似は、版本が米沢本を引用したためであろう。さらに、「或抄云」という表現は、宣賢以外の抄を指すものであろう。すなわち、米沢本が宣賢の抄ではないことを示すものと考ええる。

四

以上では、注記の対応関係から、米沢本が月舟の抄である原『蒙求抄』に養雲の説を追加したものではないかと推定した。それ以外にも、米沢本が鈴木(1970)のいうような清原宣賢系の抄物とは思われない部分がある。それは、『蒙求』の標題の内容を二字の熟語で表現する評語の扱いについてである。

京大本では、この評語は中下巻に宣賢により注記として記入されている。なお、京大本上巻には評語の記載はない。また、この評語は頭注として記入されることが多いが、場合により本文中に記入されることもある「注7」。

宣賢により京大本に加えられた注記は、数度にわたり記入されている。そして、この評語は京大本に最初に加えられた注記ではないことを住谷(2012)で示した(四一頁)。また、聴塵・版本にはこのような評語の記載はない。それに対し、米沢本では上巻から評語が記載されている。例えば、「王戎簡要」(米上8才5)では上欄に「良吏」と書かれ、墨で四角く囲まれている。

この米沢本での評語と、宣賢により京大本に記入された評語を対

比すると次ようになる。以下では、当然のことではあるが、米沢本中巻と、京大本中巻との対比である。以下で「205」等とあるのは、『蒙求』の標題番号である。標題番号の下に米中・京中としてそれぞれの所在を示す。また、「諫争」・諫争とある部分では、「諫争」のように「」で囲み米沢本での評語を示し、その下に「諫争」として京大本での評語を示す。なお、米沢本では標題番号287・291の部分には、評語が二つ記載されている。

205	米中1才2・京中1才	「諫争」・諫争
207	米中2才4・京中1才	「孝子」・孝子
211	米中4才4・京中3才	「正直」・正直
213	米中5才5・京中3才	「夢感」・承相
215	米中6才4・京中4才	「器量」・なし
217	米中6才3・京中5才	「器量」・承相
219	米中7才4・京中6才	「辯詞」・刺史
221	米中7才9・京中7才	「辯詞」・造酒
223	米中8才8・京中7才	「儒家」・才智
225	米中9才10・京中8才	「儒家」・墳墓
227	米中10才2・京中8才	「清貧」・清貧
229	米中13才10・京中9才	「貞女」・賢婦
231	米中14才6・京中10才	「廉者」・廉者
253	米中25才8・京中18才	「良吏」・良吏
255	米中26才10・京中19才	「貞女」・貞女
257	米中27才1・京中20才	「勸学」・勸学
275	米中35才7・京中27才	「勤学」・勤学

3 3 3	3 3 1	3 2 9	3 2 5	3 2 3	3 2 1	3 1 9	3 1 7	3 1 5	3 1 3	3 0 7	3 0 5	3 0 1	2 9 9	2 9 7	2 9 5	2 9 3	2 9 1	2 8 9	2 8 7	2 8 5	2 8 3	2 8 1	2 7 9	2 7 7
米中 67才 11・京中 50才	米中 66才 8・京中 50才	米中 64才 ウ8・京中 49才	米中 62才 ウ11・京中 47才	米中 61才 ウ9・京中 46才	米中 61才 ウ3・京中 45才	米中 60才 ウ4・京中 44才	米中 59才 ウ9・京中 43才	米中 59才 ウ2・京中 42才	米中 56才 ウ6・京中 42才	米中 51才 ウ11・京中 39才	米中 51才 ウ3・京中 38才	米中 50才 ウ7・京中 37才	米中 49才 ウ7・京中 37才	米中 48才 ウ6・京中 36才	米中 47才 ウ3・京中 35才	米中 44才 ウ11・京中 34才	米中 42才 ウ11・京中 33才	米中 42才 ウ7・京中 33才	米中 42才 ウ3・京中 32才	米中 40才 ウ5・京中 31才	米中 39才 ウ8・京中 30才	米中 38才 ウ5・京中 30才	米中 36才 ウ11・京中 29才	米中 35才 ウ11・京中 28才
〔交友〕・交友	〔善官〕・尊官	〔才辯〕・才辯	〔方術〕・方術	〔陰德〕・陰德	〔廉者〕・廉者	〔皆書〕・才書	〔隱遁〕・隱遁	〔宜家〕・奢侈	〔注家〕・推律	〔尊重〕・尊重	〔正直〕・正直	〔忠臣〕・忠臣	〔廉者〕・廉者	〔紙筆〕・筆	〔孝子〕・孝子	〔忠臣〕・忠臣	〔酷吏〕・忠臣・忠臣	〔忠臣〕・交友	〔君臣〕・器量・器量	〔良吏〕・良吏	〔不遇〕・不遇	〔不遇〕・師範	〔貞女〕・忠義	〔孤獨〕・無兒
3 9 3	3 8 9	3 8 7	3 8 5	3 8 3	3 7 9	3 7 5	3 7 3	3 7 1	3 6 9	3 6 7	3 6 5	3 6 3	3 5 9	3 5 7	3 5 5	3 5 3	3 5 1	3 4 9	3 4 7	3 4 5	3 4 3	3 4 1	3 3 7	3 3 5
米中 99才 10・京中 72才	米中 96才 ウ8・京中 71才	米中 94才 ウ6・京中 70才	米中 92才 ウ6・京中 69才	米中 90才 ウ8・京中 68才	米中 90才 ウ2・京中 67才	米中 89才 ウ3・京中 66才	米中 89才 ウ3・京中 65才	米中 88才 ウ7・京中 64才	米中 88才 ウ1・京中 64才	米中 87才 ウ2・京中 63才	米中 86才 ウ5・京中 62才	米中 85才 ウ10・京中 62才	米中 83才 ウ3・京中 61才	米中 79才 ウ9・京中 60才	米中 79才 ウ7・京中 60才	米中 77才 ウ5・京中 59才	米中 77才 ウ10・京中 58才	米中 77才 ウ1・京中 58才	米中 76才 ウ9・京中 57才	米中 73才 ウ10・京中 56才	米中 73才 ウ6・京中 54才	米中 72才 ウ7・京中 53才	米中 68才 ウ4・京中 51才	米中 68才 ウ1・京中 51才
〔勸學〕・口辨	〔謀計〕・謀計	〔大將〕・大將	〔法家〕・智慮	〔才智〕・才智	〔清談〕・談論	〔談言〕・泛愛	〔飲酒〕・なし	〔美貌〕・美女	〔器量〕・清廉	〔好學〕・好學	〔方術〕・方術	〔凶怪〕・凶亡	〔隱遁〕・隱遁	〔口辯〕・口辯	〔隱遁〕・隱遁	〔謹慎〕・謹慎	〔博戲〕・博戲	〔威重〕・謹慎	〔富家〕・富豪	〔愚拙〕・愚拙	〔隱者〕・仙洞	〔方術〕・方術	〔忠臣〕・忠臣	〔仁愛〕・仁愛

395 米中99ウ2・京中72オ 「暴虐」・不仁者
 397 米中100オ8・京中73オ 「諫争」・諫争
 399 米中100ウ7・京中74ウ 「才智」・聰敏

米沢本では『蒙求』で対句となっている標題の第一句にのみ評語が記入されている。米沢本で標題の第一句に対してのみ評語を記入することは、中巻ばかりではなく上巻でも同様である。これに対し、京大本中下巻では、標題の第一句・第二句のそれぞれに対し、宣賢が注記として評語を記入している。

なお、標題番号233等に対しては米沢本では評語の記載がない。ただこれらは、何かの理由で米沢本で書き落としたものとも考えられる。

さらに、米沢本と京大本とで対応する評語は全体で七十例あるが、そのうち三十二例が一致していない。もともと、標題番号253の「良吏」と「良吏」との違いは単に誤写によるものかもしれない。また、標題番号287・291では、米沢本では評語を二つあげ、一方が京大本では一致している。そのため、一致しているものとして扱うべきかもしれない。ただし、これらを除いても七十例二十九例が一致しないのである。

前に述べたように京大本の評語は、最初に注記を加えた後、中下巻に加えられたものである。そのため、これらの評語は宣賢自身により考案されたものではなく、米沢本以外の文献から引用したものと考えるべきであろう。

ところで、前節で米沢本の「養雲按」等の追加部分が、京大本注記・聴塵・版本に引用されていることを確認した。すなわち、米沢

本の本文は、京大本注記・聴塵・版本の作成以前に書かれたことになる。そのため、米沢本記載の評語を聴塵・版本が引用していないこと、また、京大本では他書から評語を引用していることは、問題となろう。すなわち、評語を含む米沢本の記載は宣賢によるものではなく、宣賢が何等かの取捨選択により、京大本注記・聴塵・版本に引用していることを示すものと考えられよう。

五

これまで、原『蒙求抄』を月舟の抄と考えてきた。それは、蓬左本巻頭に「私云序ノ分月舟和尚ノ本ヲ書ソ」とあることによる。しかし、前に述べたように蓬左本の序を書写した人物が、宣賢の抄である原『蒙求抄』を月舟の抄と誤解していた可能性も残る。もしそのように考えられるのであれば、米沢本は鈴木(2000)のいうように「宣賢講を養雲が補講したものに「私」なる者が自説その他を加えたもの」(五頁)ということになる。ただし、現在の米沢本には、とりたてて「月舟曰」あるいは「幻雲曰」等の記載が多く見いだせるわけでもなく、また特に月舟の抄と誤解する原因となるものも見いだせない。

また、前で示したように、米沢本の「養雲按」等の追加部分が、京大本注記・聴塵・版本に引用されていることはわからない。同様に、原『蒙求抄』が宣賢の抄であるとしても、それに養雲が自説を追加したものが米沢本であることもわからない。そのため、宣賢は米沢本中の自分の説と養雲による追加の説とを引用することで、京大本注記・聴塵・版本を作成・講述したことになる。その可能性を否定する材料はないものの、不自然に感じられるがいがであろう

(住谷芳幸)

か。

以上、「養雲按」等の追加部分の引用関係、評語の扱いなどから、米沢本を清原宣賢系の抄物とすることに疑問があることを示した。もともと、米沢本に含まれる原『蒙求抄』が月舟の抄であることを示す決定的な証拠も見いだせないことも事実である。今後、さらに各本の引用関係を細かく検討することで、確実な証拠を見いだせるのではないかと期待している。

注1 鈴木 (1970) (九頁)。

注2 鈴木 (1970) では、この養雲について内閣文庫蔵の『三体詩抄』の識語等から、月谷養雲とする (四頁)。なお、この内閣文庫蔵本は、『三体詩幻雲抄』(勉誠社1978)として出版されている。また、『三体詩幻雲抄』の成立について、その解説では、「幻雲は(略)先輩諸老の三体詩の抄ならびに講義を集め、本の上に記し置いた。そしてこれを戯子、すなわち月舟寿桂の弟子継天寿戢が整理・補記して本抄になった(六三〇頁)」とする。また、「月谷養雲は継天の原三体詩法抄か、あるいはそれからの転写本を得て筆写し、みずからの意見を加えて三体詩講義の種本となしたのであろう。本抄に多く見られる「養按……」「養謂……」などの注記はその間の事情を表わしている(六三三頁)」とする。さらに、「この月谷養雲の筆が加わった三体詩法抄を(略)さらに転写した(六三三頁)」ものと説明する。

注3 『抄物資料集成第六卷』(清文堂1971)による。

注4 鈴木 (1970) のいうように、「宣賢講を養雲が補講したものに「私」なる者が自説その他を加えたもの」(五頁)としても、養雲が自説を追加した後に、さらに「私」が自説を追加した可能性と、「私」が養雲の説と自説とを合わせて追加した可能性との二つが考えられる。

ただし、論が煩雑になるため、以下では養雲による追加として扱う。

注5 具体的には次のようにある。

(米中81ウ7)

當年大永三年ハ天元甲子ヨリ七兆令七萬令八

百四十一年ト算ヲ置ク也

(聴中59ウ9)

今ノ大永三年ハ天元甲子ヨリ七兆令七萬令

八百四十一年ト算ヲ置也

なお、本稿では鈴木 (1970) でいう「亀井孝氏蔵」の『蒙求抄』は参照できなかった。

注6 具体的には次のようにある。

(版559ウ6)

今享祿二年ハ大元甲子

ヨリ七兆令七萬令八百四十六年ト算ヲ置也

注7 住谷 (2012) (四十頁)。

参考文献

- 池田利夫 1988 『蒙求古註集成上巻』 汲古書院
 池田利夫 1989a 『蒙求古註集成中巻』 汲古書院
 池田利夫 1989b 『蒙求古註集成下巻』 汲古書院
 池田利夫 1990 『蒙求古註集成別巻』 汲古書院
 鈴木 博 1970 『清原宣賢系の蒙求抄について』 國語國文第39巻9号
 住谷芳幸 2012 『国立国会図書館蔵『蒙求聴塵』について』 岐阜女子大学紀要第41号
 玉村竹二 2003 『五山禪僧傳記集成【新装版】』 思文閣出版

なお、本稿は科学研究費補助金「広範囲からの引用に着目した抄

物の研究」(基盤研究(C) 研究代表者・住谷芳幸)(24500316)による成果の一部である。